

めくら鉄砲

私が生家を離れたのは、十七才の九月国民徴用令で、横須賀海軍工廠受信実験所に入所した時である。

高等小学校を卒業（今の中学二年）後、農業を手伝いながら山の入にあつた宮城珪藻土株式会社で働いていた。戦時中で長兄雄一郎は満州（中国）に出征し、次兄富一郎は入営したばかりだった。

父文一郎は蔵王町の前身、円田村役場の助役で村長の補佐をしていた。若い時から鉄砲撃ち（狩猟）が好きで、毎年解禁時には、暇を見ては鉄砲撃ちに出掛けていた。

雉子（キジ）山鳥、野兔、などを獲ってきた。あの時代狩猟許可は成人で猟銃があれば簡単に貰えた。猟銃は実弾と共に居間に置いてあり、保管はルーズで、兄は時々持ち出しては、山に行つて雉子や野兔を捕つてくる。屋敷に柿の大木があり、雀が群をなして集つて居るのを、ドカーンとやる、散弾だから一発で多い時には十羽以上も落ちてくる。現代だったら大変な事になる。

捕つて来ると、ライスカレー（カレーライスと云わなかつた）や肉汁だった。牛肉、豚肉は殆ど食べた事がなかった。近くには肉屋が無かつたし、何処の家もお金を出して、肉を買う事はしなかつた。

狩猟に行くとき連れて行く雑種の犬を飼っていた。狩猟には忠実な犬で、猟銃を持つと、先になつて山に向かつて

歩き出す。獲物の匂いを嗅ぎ、木立の中に隠れている、雉子、山鳥を追い出す。飛び立って逃げていく鳥に、狙い定めて発砲する。うまく命中すれば、藪の中に落ちる。猟犬は素早く獲物をくわえて、主人の許に運んで来る。

私が十五、六才の頃一人無断で猟銃を持ち出し、近くの山に出掛けた時だった。杉林の脇を歩いてみると、犬が急に林の中に駆け込んだと同時に、雉子が飛び立った。私は慌てて猟銃を向け発砲した、狙って撃つたのではない、メクラ鉄砲である。そうしたらどうだろう、命中し落ちてきた、犬がくわえて来た雉子を持って、家に帰った

獲物をどうしたか憶えていない、私の一生一度の出来事だ、場所はだいたい憶えている、よく遊びに行く同級生の太田はるいさんの裏山あたりだ。

狩猟期間は十月頃より翌年三月頃まで、冬の寒い季節だ。一面銀世界の山野を駆けめぐる、山鳥や兎の独得な足跡を見つけ、それを辿る。私も父について行った事が二、三回ある。小学生の頃の陽光が眩しい新雪の銀世界。ケーンケーンと鳴きながら飛び立つ尾の長い山鳥。長く続く兎の足跡。山野の響き渡る発砲の凄まじい銃声。ワンワン啼きながら獲物を追いかける猟犬。幼き日々の記憶が甦り、今は亡き父や、兄を偲び一人涙する